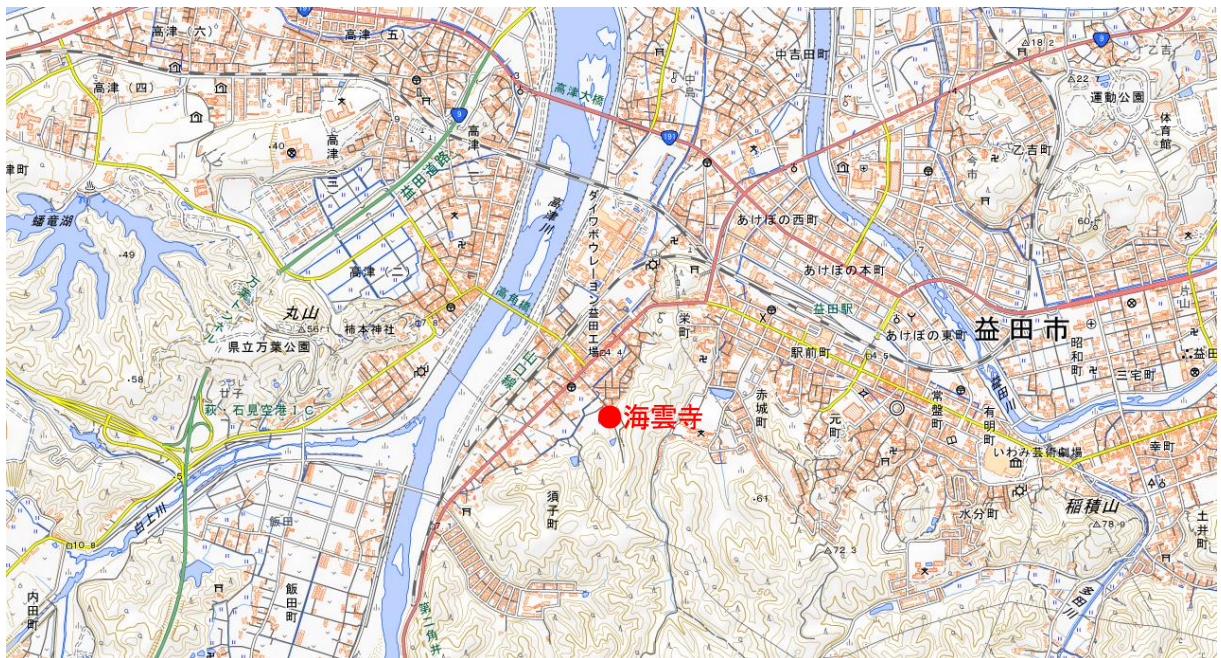


益田市内石造物調査概報 3

—長野荘域の石造物調査 2 海雲寺及びその周辺の墓地—



令和 3 (2021) 年 3 月
益田市教育委員会

例 言

1. 本書は、益田川・高津川下流域寺社調査事業、河口域関連史料調査事業の一環として実施した益田市須子（すこ）町の曹洞宗東松山海雲寺及びその周辺の墓地の石造物調査の報告書である。
2. 本書に係る調査の経過は以下のとおりである。
平成 27 年度 当該地域の中世石造物の実測と石材の鑑定
令和 2 年度 当該地域の中世石造物の実測と石材の鑑定
3. 調査は次の組織で実施した。
事務局（平成 27 年度）木原光（文化財課課長）、石田公（同課長補佐）、山本浩之（同主幹）、長澤和幸（同指導主任）、佐伯昌俊（同主任主事）、中司健一（同歴史文化研究センター主任主事）
（令和 2 年度）山本浩之（文化財課課長）、長澤和幸（同課長補佐）、松本美樹（同主査）、林弘幸（同副主任主事）、中司健一（同歴史文化研究センター主任）
調査指導者 西尾克己（元島根県古代文化センター長）
中村唯史（島根県立三瓶自然館サヒメル企画情報課調整幹）
調査員 長澤和幸、佐伯昌俊、林弘幸、中司健一
4. 実測図・写真は益田市教育委員会文化財課（益田市常盤町 1 番 1 号）で保管している。
5. 調査にご協力いただいた各所蔵者、各管理者、ご指導をいただいた西尾克己、中村唯史、種子についてご教示いただいた間野大丞（島根県文化財課世界遺産室石見銀山世界遺産センター。）の各氏にお礼申し上げます。
6. 石材全般については、中村氏からご教示いただいた。
7. 石造物の実測・トレースは、西尾氏の指導により佐伯・林が、本書の執筆・編集は中司が行った。
8. 表紙の写真は海雲寺参道の石造物群、地図は海雲寺の位置図（地理院地図に加筆）である。

第 1 章 調査の目的及び調査地の概要

第 1 節 調査地の概要

海雲寺が所在する益田市須子町は、一級河川高津川の下流域の右岸に位置し、中世には荘園・長野荘を構成する郷のうち、須子郷及び角井郷に相当する（須子がイ番、角井がロ番である）。

荘園長野荘は、高津川中流域・下流域に形成された荘園で、「庄内七郷」と呼ばれた高津・須子・角井・吉田・安富・豊田・横田の各郷と飯田・虫追などの高津川沿いの平地や、白上・俣賀・梅月・美濃地・黒谷などの山間部の各郷により構成されていた。そして、豊田・横田に内田氏、俣賀などにその一族である俣賀氏、安富に安富氏といったように、各郷に小領主が割拠し、それが室町時代まで続いた。室町時代以降、東の益田荘を支配下に納めた益田氏が長野荘にも影響力を持ち始め、鹿足郡（中世には吉賀郡とも）の領主吉見氏との激しい争いののち、戦国時代までには益田氏の支配下に納められていく。

須子郷の歴史を概観する。暦応 3（1340）年に俣賀致義が弘安 3（1282）年の譲状どおり「須子村内田屋敷」を安堵され、康永 3（1344）年頃には俣賀氏と覚融庵主との間で「須子女し(子)分」が争われている（「俣賀文書」9、12、13号）など、俣賀氏が須子に権益を保持していたことがわかる。永徳元（1381）年には須子駿河次郎が角井村の領家職を宛行われており（「閩閩録」巻 121 周布 289 号）、須子と角井にまたがって勢力を持つ領主がいたことが知られる。戦国時代には大内氏や吉見氏

の家臣に須子氏が見える（「下瀬文書」、「閥閥録」巻 152 益成 2 号、「益田高友家文書」）。また、益田氏の家臣にも須子氏がいた可能性がある（「松江八幡宮文書」）。

関ヶ原の合戦後、益田氏が益田を去ると、最初は石見銀山領となるが、元和 3（1617）年に亀井氏が津和野藩主となると、津和野藩領となる。

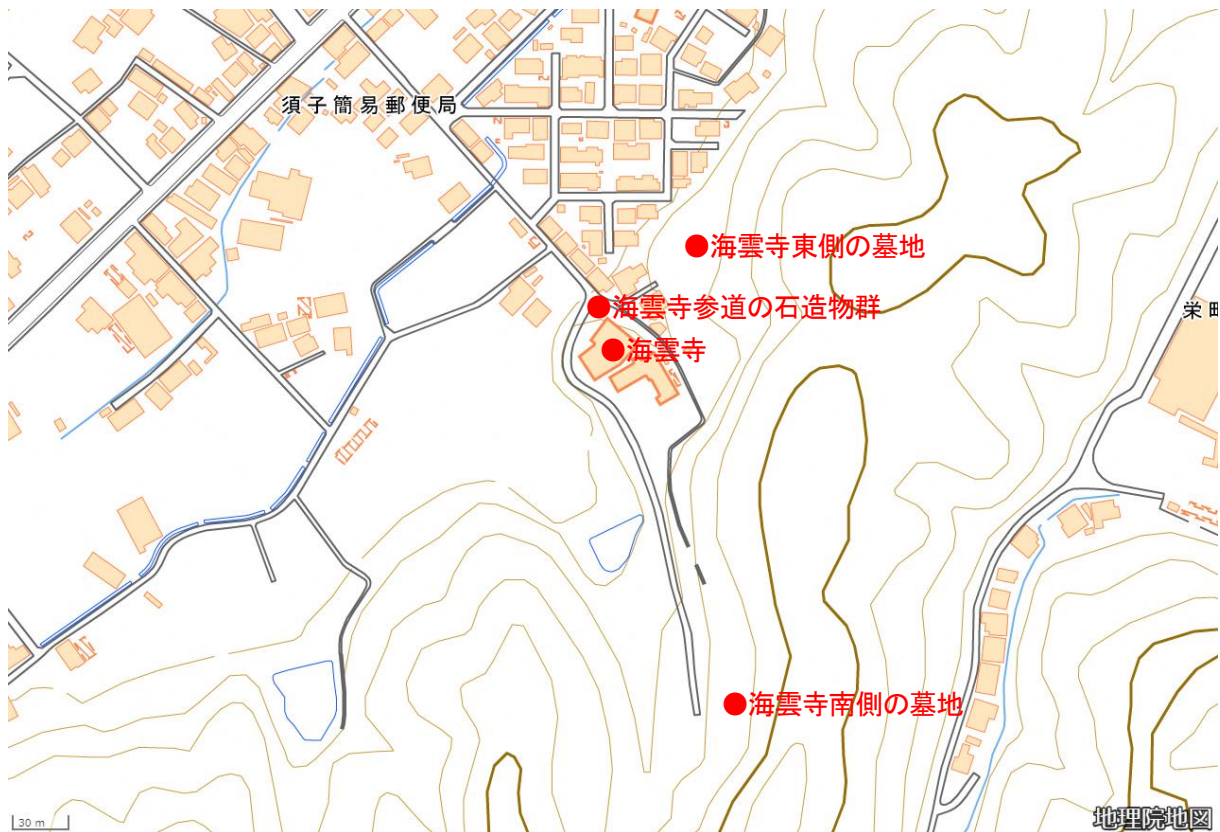
海雲寺は、天正 12（1584）年に妙義寺の住職黄山殊梅を開山として開かれたと伝わるが、天正 9 年に妙義寺の末寺とされた「十五ヶ所」の一つ（「妙義寺文書」）と考えられるため、再考の余地がある。当時の寺名は東伝寺であったが、同じ妙義寺末寺に同名の寺があったため、江戸時代に海雲寺と改めたという。

第 2 節 調査の目的

長野荘は、中世には中小規模の領主が割拠していた地域であり、領主間の関係をうかがうことができること、また、内田氏・俣賀氏は西遷御家人として新たに移ってきた領主であるため、地域に支配をどのように浸透させようとしたかを考察することができること、そして古文書や絵図、現地の景観、伝承等、これらを検討するための材料が豊富に存在することから、平成 28 年度から平成 30 年度まで国立歴史民俗博物館の共同研究「中世日本の地域社会における武家領主支配の研究」（研究代表者：同館准教授田中大喜氏）の基軸事例に位置づけられ、文書調査、出土遺物調査、聞き取り調査、現地調査等が実施された。

本書は、この共同研究の成果を踏まえ、また、その一助となること、それにより、中世高津川下流域の実態解明に資することを目的の一つとする。

また、石造物研究において、近年、中世的な石塔から近世的な墓への変遷についての事例蓄積と研究が進んでいる。海雲寺南側の墓地の寄墓には、この地域の変遷を追う上で手がかりとなり得るものが複数見られたため、紹介することとしたい。



【図 1】海雲寺とその周辺の墓地の位置図

第2章 調査の概要

第1節 調査の方法

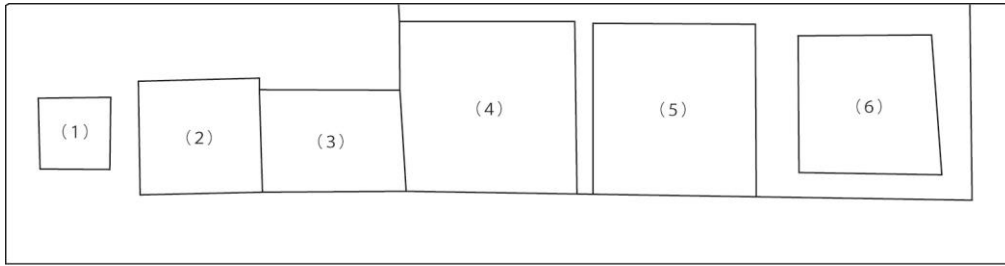
現地調査にあたっては、調査対象地の石造物の分布状況を確認し、デジタルカメラによる写真撮影と代表的な石塔の実測を行った。また、可能な範囲で石材を鑑定した。

【表1】海雲寺とその周辺の石造物一覧表

所在	番号	種別	部材	石材	図面	写真	備考
1 海雲寺 参道	1-(1)-①	五輪塔残闕	空風輪	花崗岩	1-(1)-①	1	
	1-(1)-②	五輪塔残闕カ	水輪カ	安山岩	1-(1)-②	1	
	1-(1)-③	五輪塔残闕	水輪	花崗岩	1-(1)-③	1	前後左右に梵字
	1-(1)-④	宝篋印塔残闕	塔身	安山岩	1-(1)-④	1	四面に種子
	1-(2)-②	五輪塔残闕	地輪	花崗岩		2	
	1-(4)-①	五輪塔残闕	空風輪	花崗岩	1-(4)-①	3	
	1-(4)-②	五輪塔残闕	火輪	花崗岩	1-(4)-②	3	四面に種子
	1-(4)-③	五輪塔残闕	水輪	花崗岩	1-(4)-③	3	
2 海雲寺 東側の 墓地	2-(1)-①	宝篋印塔残闕	相輪	白色凝灰岩	2-(1)-①	4・5	
	2-(1)-②	宝篋印塔残闕	相輪	白色凝灰岩	2-(1)-②	4・5	
	2-(1)-③	宝篋印塔残闕	笠	白色凝灰岩	2-(1)-③	4	
	2-(1)-④	宝篋印塔残闕	相輪	白色凝灰岩		4・5	
	2-(1)-⑤	宝篋印塔残闕	相輪	白色凝灰岩		4・5	
	2-(1)-⑥	宝篋印塔残闕	笠	白色凝灰岩		4	
	2-(1)-⑦	宝篋印塔残闕	相輪	安山岩		6	
	2-(2)-①	宝篋印塔残闕	塔身	花崗岩	2-(2)-①	7	四面に種子
	2-(2)-②	宝篋印塔残闕	基礎	角閃石の見えない安山岩	2-(2)-②	7	
3 海雲寺 南側の 墓地の 寄墓	3-①	一石宝篋印塔	基礎部欠	火山礫凝灰岩 (福光石)	3-①	8	
	3-②	一石宝篋印塔	相輪部欠	火山礫凝灰岩 (福光石)	3-②	8	
	3-③	墓標	尖頂方形	花崗岩		9	寛文2(1662)年銘 縦52.5×横27.2
	3-④	墓標	尖頂方形	花崗岩	3-④	9	延宝3(1675)年銘 縦66.3×横30.5
	3-⑤	墓標	尖頂方形	花崗岩 (磁性なし)		9	延宝8(1680)年銘 縦73.2×横24.2
	3-⑥	墓標	尖頂方形	花崗岩		9	貞享4(1687)年銘 縦89.5×横32.3
	3-⑦	墓標	尖頂方形	花崗岩		9	貞享5(1688)年銘 縦89.5×横30.0
	3-⑧	墓標	尖頂方形	砂岩		10	元文2(1737)年銘 縦43.0×横21.0
	3-⑨	墓標	頂部三突起方形 (円形の陽刻あり)	青野山系 安山岩	3-⑨	9	元禄16(1703)年銘 縦54.5×横22.6× 厚(張出部13.5、 それ以外12.3)
	3-⑩	墓標	頂部三突起方形	青野山系 安山岩		9	□□十一年銘 縦48.5×横17.6× 厚(張出部12.5、 それ以外12.0)
	3-⑪	墓標	円頂方形 (円形の陽刻あり)	青野山系 安山岩			元禄9(1696)年銘 縦48.0×横19.8× 厚(張出部13.8、 それ以外12.5)
	3-⑫	墓標	円頂方形 (円形の陽刻あり)	青野山系 安山岩		9	宝永3(1706)年銘 縦48.3×横19.3× 厚(張出部12.5、 それ以外11.5)
	3-⑬	墓標	円頂方形 (円形の陽刻あり)	青野山系 安山岩		9	正徳3(1713)年銘 縦48.8×横19.5× 厚(張出部14.5、 それ以外13.8)

第2節 石造物の概要

1 参道の石造物群



【図2】海雲寺参道の石造物群配置図



(1/20)

海雲寺の参道に位置する（表紙、図1・2）。

(1) に上から、①五輪塔の空風輪（花崗岩）、②五輪塔の水輪カ（安山岩）、③五輪塔の水輪（花崗岩）、④宝篋印塔の塔身（安山岩）が積まれている。もとはそれぞれ別々の石塔の部材であったと思われる。

①空風輪は風輪の上部に傾斜を作る。

②については、空風輪の空輪が失われたものの可能性もある。

③水輪は前後左右に種子を彫り、正面から左回りに、バ、キャ、バンカ、判別困難である。下半がすぼまっていないことから、古いものの可能性がある。ただし、種子は小ぶりに彫られている。

④塔身は四面に種子を彫り、正面から左回りに、キリーク、アク、ウーン、判別困難である。

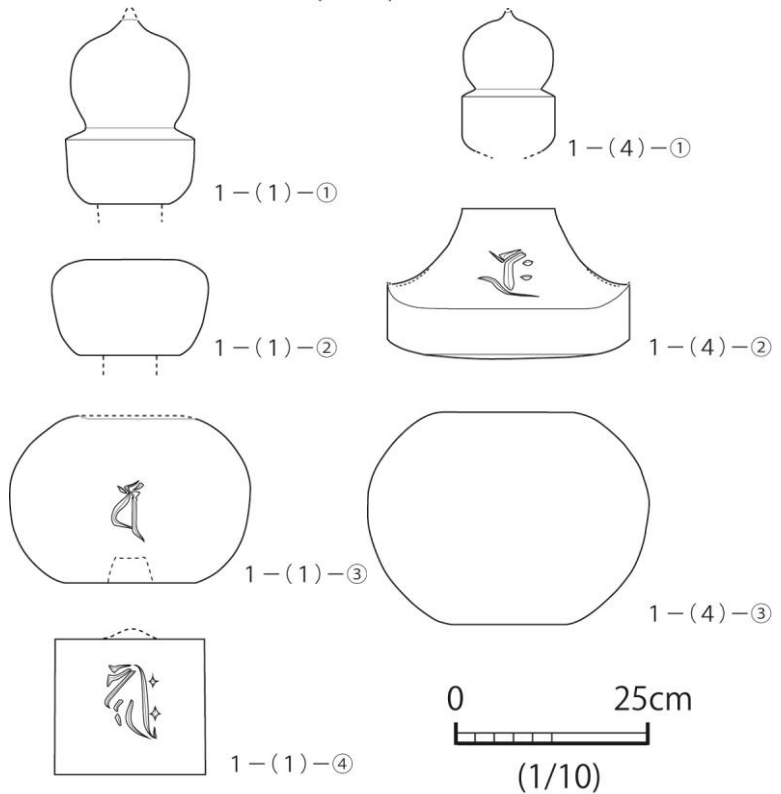
(2) の一番下に②五輪塔の地輪（花崗岩）がある。周囲を他の石造物に囲まれているため、調査は困難である。

(4) には、①五輪塔の空風輪（花崗岩）、②五輪塔の火輪（花崗岩）、③五輪塔の水輪（花崗岩）が積まれている。ただし、それぞれの大きさや種子の有無から、もとは別々の五輪塔の部材であったと思われる。

①空風輪は風輪の上部に傾斜を作る。

②火輪は四面に種子を彫り、正面から左回りに、ラク、ラ、ラー、ランである。

③水輪はやや下半がすぼまっているが、下半分の曲線がしっかり表現されている。



【図3】海雲寺参道の石造物の実測図

2 東側の墓地の石造物群

(1) 歴住墓の石造物群

東側墓地の歴代住職墓が並ぶ画地の中に、宝篋印塔の残闕がまとまって置かれている（写真5）。現状、相輪の残闕が5点、笠の残闕が2点ある。

このうち相輪の残闕2点と笠1点は本来一体であったと思われる、それが2組ある（写真5及び写真6）。これらは白色凝灰岩の組み合わせ式宝篋印塔で、ほぼ同型と思われる。型式から大田市域からの搬入品と推定される。中世末から近世初頭のものである。

残る⑦相輪は、安山岩製で、九輪の溝や請花をしっかりと表現しており、15世紀以前のもの可能性がある。

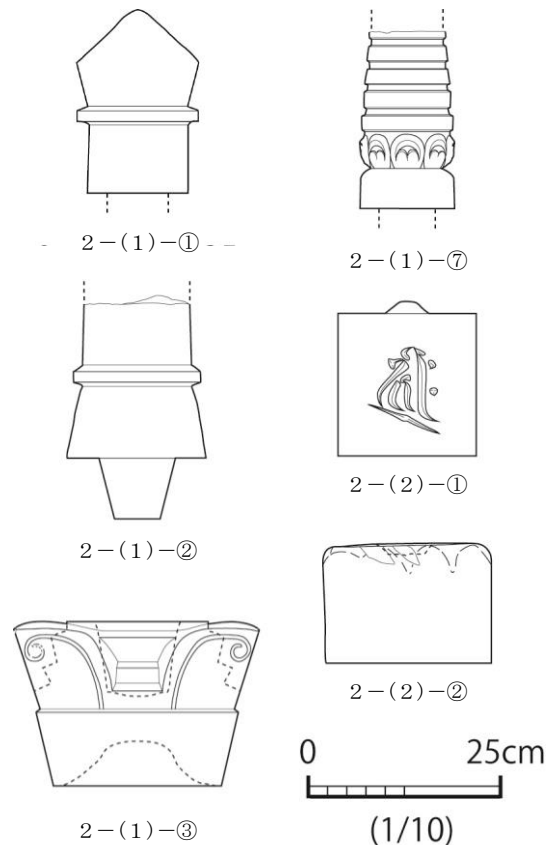
(2) K家墓地の石造物群

歴代住職墓の画地の南側に位置する。

宝篋印塔の①塔身（花崗岩）と②基礎（安山岩）が積み重ねられている。石材や大きさから、もとは別の石塔のもとと判断される。

①塔身は、四面に種子を彫り、正面から左回りに、キリーク、アク、ウーン、タラークである。

②基礎は、風化もあってか、蓮弁や格狭間の表現がほとんどわからない。蓮弁の痕跡がかすかに見える。



【図4】海雲寺東側墓地の石造物の実測図

3 南側の墓地の寄墓の石造物群

海雲寺南側の墓地には寄墓がある。東側の墓地にも共通するが、浄土真宗など他宗派の墓石もある点には留意する必要がある。

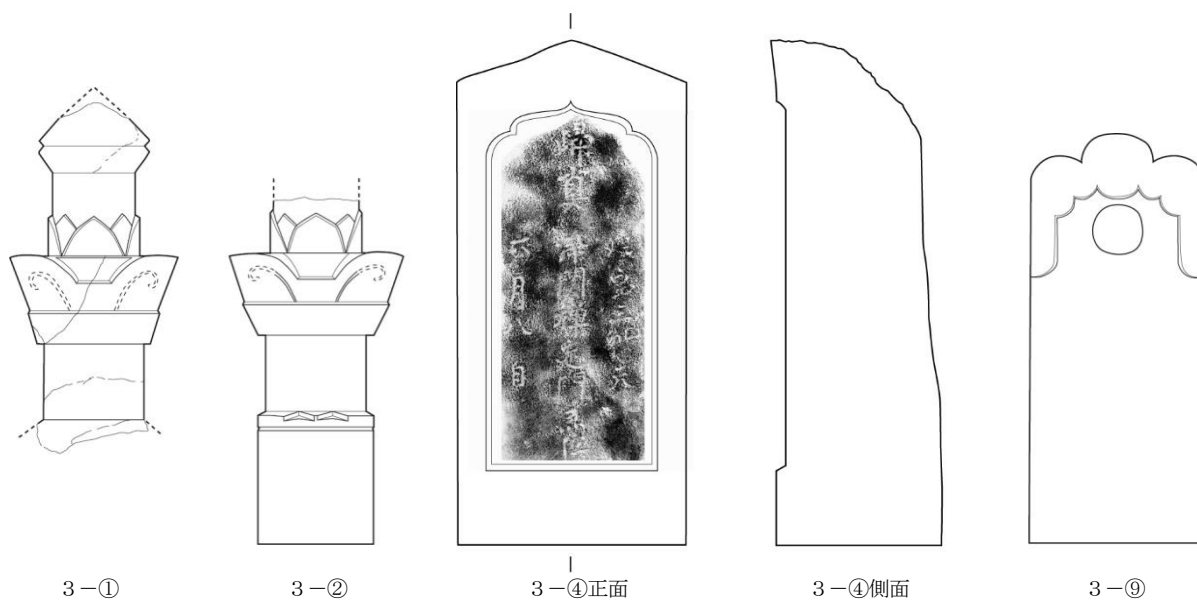
寄墓の中に、一石宝篋印塔が2点（①②）ある。これらはいずれも凝灰岩で福光石製のものである。

このほか、江戸時代前期のものと思われる墓標が複数見られたため、その概要を報告する。

まず、尖頂方形墓標とされる形状のものが計6点ある（③～⑧）。これらのうち5点は花崗岩製で、1662から1688年までの銘が見える。続いて、津和野藩領独特の形態である頂部三突起方形墓標とされる形状のものが2点あり（⑨⑩）、うち1点は元禄16（1703）年の銘がある。さらに、円頂方形墓標とされる形状のものが3点あり（⑪～⑬）、これらは古いものから、元禄9（1696）年、宝永3（1706）年、正徳3（1713）年の銘がある。頂部三突起方形墓標、円頂方形墓標はいずれも青野山系安山岩製である。

以上の、尖頂方形墓標、頂部三突起方形墓標、円頂方形墓標の年代は、池上悟氏が津和野地区の近世墓石を検討して得られた結果に当てはまる（池上・2016）。このことから、益田市の旧津和野藩領における近世墓の変遷について、花崗岩製の尖頂方形墓標が先行し、高津川上流域の青野山系火山岩製で、津和野藩領独特の形状である頂部三突起方形墓標と円頂方形墓標が、尖頂方形墓標に代わって主流になっていくという見通しを立てることができる。

なお、尖頂方形墓標については、⑥元文2（1737）年の銘の砂岩製のものがある。このことも、やはり遠方のものに代わって近隣の墓石が流通した可能性を示唆するように思われる。



3-①

3-②

3-④正面

3-④側面

3-⑨

0 25cm

【図5】海雲寺南側墓地の石造物の実測図 (1/10)



【写真1】1-(1)



【写真2】1-(2)



【写真3】1-(4)



【写真4】2-(1) 東側墓地の歴住墓の画地の宝篋印塔群



【写真5】2-(1)-①②④⑤



【写真6】 2- (1) -⑦



【写真7】 2- (2)



【写真8】 3-①②



【写真9】 3 南側墓地の寄墓（東側から）



【写真10】 3-⑥元文二年銘尖頂方形墓標

※写真の縮尺は同一ではない。

【参考文献】 間野大丞「高津川上・中流域の宝篋印塔」(『宍道町歴史叢書』1号、1996年)。池上悟「津和野藩主亀井家墓所における墓石の様相」(『考古学論究』18号、2016年)。佐伯昌俊「石見地方西部における中世墓終焉期の諸様相」(『第7回中世葬送墓制研究会資料 山陰地域における中世墓終焉期の様相』中世葬送墓制研究会、2016年)。国立歴史民俗博物館『中世益田現地調査成果概報』Vol.1、2017年。

市内石造物調査概報 3

—長野荘域の石造物調査2 海雲寺及びその周辺の墓地—

発行・印刷 令和3年3月31日

編集・発行 益田市教育委員会

印刷 のさか印刷 (島根県益田市高津五丁目 28番8号)